

ホイアン、チャンフー通りの家屋修理

A REPORT ON THE REPAIR OF HISTORICAL HOUSING IN HOI AN TRAN PHU STREET

林 良彦*
HAYASHI Yoshihiko

Many historical houses in Hoi An are suffering from extensive leakage and termite damage. In 1993 and 1994, with the financial and technical aid from the Japanese side, the Hoi An Vestiges Management Office carried out major repair on 2 houses and emergent roof repair on 11 houses in Hoi An Tran Phu Street. The main aim of Japanese side is to foster architectural preservation experts in Vietnam.

現在までに日本側の協力で以下の修理工事を行なった。

1. チャンフー 80 番家屋

橋家解体修理 1993.9～94.2

前家屋根葺替部分修理 1995.1～3

後家半解体修理 1995.1～3

2. チャンフー 121 番家屋

前家解体格納及び前面修景 1994.9

3. チャンフー 25、26、53、65、 72、96、113、123、134、 142、151 番家屋の緊急屋根葺替

1. チャンフー通り 80 番家屋 (図1～3参照)

チャンフー通りのほぼ中央に位置し、通りの北側に短冊形の敷地を有する。通り沿いから敷

地奥へ前家・橋家・後家の3棟からなる。前家、後家は敷地の幅一杯に建ち、間の橋家は敷地の西側に寄せて東を中庭としてコの字形の棟とする。

敷地両側面の隣地境界は1枚積みの煉瓦壁を屋根面まで立ち上げる。

南北ベトナム統一後は政府所有となったが、引き続き元の所有者のタイ＝タンタイ氏が居住する。建築年代はタイ＝タンタイ氏が記憶している1920年代と考えられ、前家、橋家、後家は同時に建てられたと見られる。

①前家

桁行3間、梁間3間、2階建て、切妻造、陰陽瓦葺平入り2階正面及び背面に跳ね出しのバルコニー付き。

* 文化庁文化財保護部建造物課

Technical Official, Agency for Cultural Affairs

1階内部は正面側2間と背面側1間を間仕切り2室とする。2階は大きな1室であるが、東北隅に小部屋を仮設し、中央を1階からの吹き抜けとする。橋屋の取り付け背面バルコニーの西半は橋家側に取り込む。

柱は正面、背面通り及び2階ベランダ柱を角柱とし、その他を円柱とする。柱足元に石製礎盤^{そばん}を置く。1・2階の柱はバルコニーを除き同じ位置に立つが、通し柱は正背面の隅柱と背面の西から2本目の柱だけで、その他は管柱である。1階の柱頭に梁間方向の床梁を落とし込み、桁行方向には床梁上に載る根太で柱の位置を固定する。2階の柱は中央の梁間を差し梁で固め、この2通りの桁行柱筋にも繋ぎ材を入れるが、その他の柱中間には繋ぎを入れない。小屋は柱を輪^わ籠^{なご}込んで登梁を入れ、棟は登梁同士を相欠きにして合掌とし、下の差し梁から束を立てて受ける。梁間方向中央間を身舎とし前後を庇とする構成を取る。柱頭及び登り梁の上に母屋を配り、板垂木を打って垂木間に平瓦を並べ野地を作る。屋根は薄い素焼きの同形の平瓦を表裏交互に葺いたアムジュン（陰陽）と呼ばれる葺き方である。

②橋家

桁行1間、梁間1間、2階建て、入母屋造、陰陽瓦葺2階東面にバルコニー付き。

1・2階とも前家側の合いの間を取り込んだ

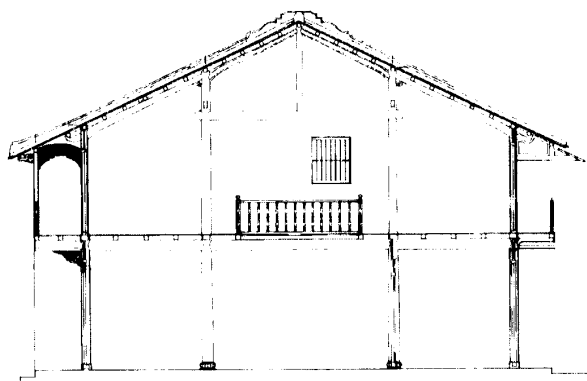


図1 チャンフー80番前家断面図

1室で、後家側の合いの間を階段室とする。柱は全て角材とする。東側2本の柱を通し柱とし、床梁を差し通す。西側は管柱で1階柱の柱頭に床梁を蟻落^{ありお}とし、根太を東側に跳ね出してベランダの床を支える。柱筋の根太は幅を狭めて柱に差し通し、柱の繋ぎを兼ねる。小屋組登梁を合掌形に組み、両端は柱に輪籠^{わなご}込んで入れる。合掌の上部には補強の貫を入れるので全体はA形となる。ベランダ側の母屋は持ち出して妻の母屋を相欠きで受けて入母屋形の屋根を造る。屋根は前家と同じ陰陽瓦葺きである。

③後家

桁行3間、梁間1階3間、2階4間（背面側壁は煉瓦造）2階建て、切妻造、陰陽瓦葺き、2階正面にバルコニー付き。

1階は西北隅の桁行1間梁間2間を部屋に区切る間仕切を仮設し、2階は西北と東北の桁行1間梁間2間を部屋に区切る。正面側柱と正面2階バルコニー柱を角柱、その他を円柱とし、正面両脇の柱を通し柱とする。2階床組は各柱を梁間方向の床梁で繋ぎ、床梁上に配った桁行方向の根太は柱筋位置では繋ぎ材を兼ねる。2階は背面から第2の柱筋の柱は1階の柱と同じ位置に立つが、これより正面側は1階の2柱間を2階では3柱間に割る。小屋組は2階の前方3間を前家と同じ構成とし、後端の間も同様の登り梁で繋いだ構造とする。東面の後ろよりに

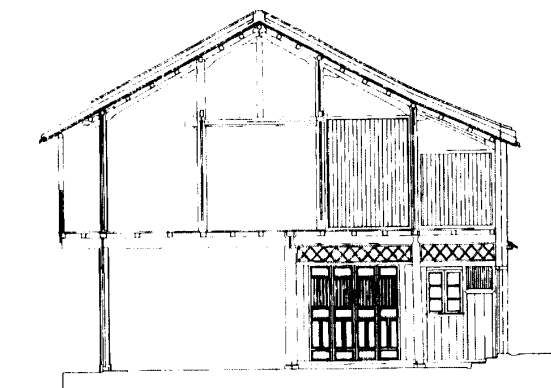


図2 チャンフー80番後家断面図

煉瓦造（木造小屋組）、平屋建て、切妻造陰陽瓦葺の物置が附属する。

(1) 破損状況

①前家

軸部に大きな腐朽破損はみられなかったが、地中から柱足元に蟻道が伸びているのが観察でき、部分的に被害を受けていた。表面に現れた腐朽部材としては2階根太のうち東間中央に桁行に入るものや、正面^{ちふく}框下の地覆、背面出入口の敷居があげられる。このほか、2階正面ベランダ床の耳板が脱落していた。屋根は正面側広木舞の釘が切れて脱落し、野地と瓦がずれて雨漏りが生じていた。

②橋家

前家・後家に取付く谷部が長年の雨漏りによって破損し、そのまま放置されていたため腐朽破損が著しかった。柱・梁・根太・床板・母屋・垂木・壁板等のすべての種類の材に蟻害がみられた。特に西側の煉瓦壁沿いの管柱・床梁・根太・小屋組に、甚大な被害がある。階段室は雨漏りが原因で、段板や^{さきあげた}簷桁の釘や部材が腐朽し、分解大破して原形をとどめていなかった。

③後家

橋家同様雨漏り及びそれによって引き起こされた蟻害の被害が甚大であった。2階東妻の正面から第3柱上部には白蟻の巨大な営巣が認め

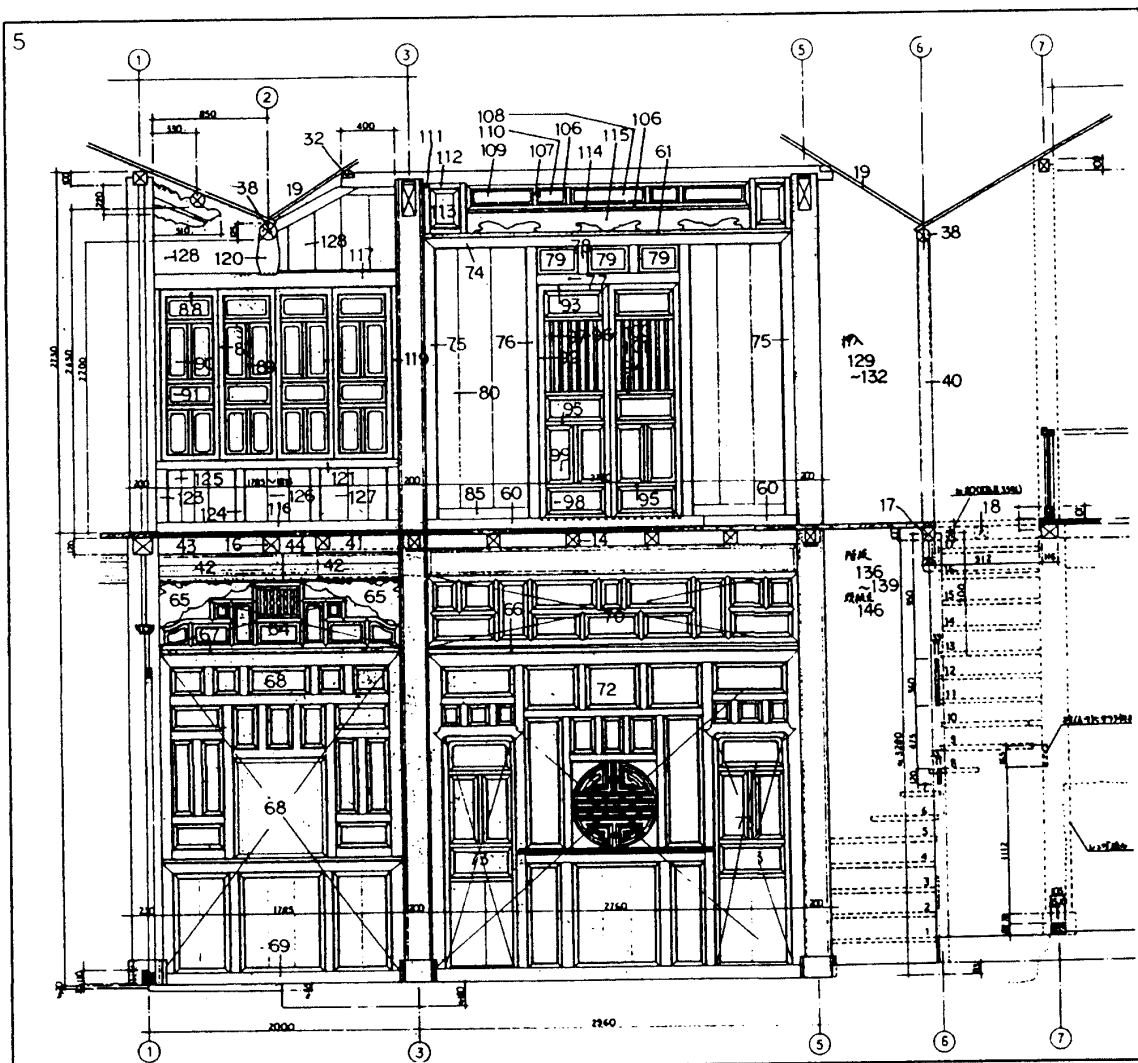


図3 チャンフー80番橋家立面図（作図：日本建築セミナー 増田千次郎）

られ、この部分はすでに部材が欠損しモルタルを詰めて補強してある状態であった。このほかにも蟻害を受けた部材は随所にみられ、特に2階部分の被害がひどかった。屋根は前家と同様広木舞の脱落とそれに伴う瓦のずれが認められたが、状態はさらに悪く、すでに垂木、母屋等の腐朽脱落が著しかった。垂木の脱落とともに瓦が内側に落下し、屋根に穴が開いている箇所があった。

(2) 今回工事の内容

①前家

屋根葺替部分修理：屋根は一旦全部解体し葺替えた。脱落、腐朽した木部の補修取替を行った。破損した正面2階トール屋根を造り替えた。

②橋家

解体修理：屋根、木部とも一旦全部解体し、腐朽破損した木部の補修取替を行い組み立てた。

③後家

半解体修理：屋根と2階部分を解体し、腐朽破損した木部の補修取替を行い組み立てた。

2. チャンフー通り121番家屋 (図4、5参照)

チャンフー通り西寄りの通りの南側に位置する。居住者はこの家で醤油を作って販売している。以前は敷地背後に橋家、後家等の附属家が建っていたと考えられるが、現在は新しい小屋

が建っている。前家部分は当初は谷を挟んで前後に2棟が接続していた構造であったと考えられるが、この前方部分だけが残存している。建築年代は明確でないがチャンフー80番と比べると明らかに古く、18世紀末から19世紀の初め頃と考えられる。

桁行3間、梁間4間、平屋建て、切妻造、陰陽瓦葺。両側面の隣地境界に母屋下まで煉瓦壁を立ち上げ、正面通り及び背面通りの両側煉瓦壁沿いの柱を略する。正面通り1間を吹放しの庇とし、その奥の柱筋に建具を建てて内外に仕切る。中央間は板扉両内開きとし、両脇間は小幅板を落とし込む部とする。棟を正面より第3間の中央とし、この間の両側の柱同士を差梁で繋ぐ。桁行方向は正面から第3第4の柱筋の差梁やや上部に繋ぎ材を入れるほか、各柱筋の母屋下に接して繋ぎ材を入れる。小屋は柱頭に輪薙込んだ登梁によって母屋を受ける。板垂木を打ち、瓦と同じ材質の平板瓦をその上に置いて野地とする。

(1) 破損状況

屋根は広木舞が脱落して軒先部の瓦が落下し、瓦がずれて棟際に隙間が開いていた。雨漏りとそれによる垂木や母屋の腐朽で野地が大きく陥没していた。木部は垂木や母屋のほかにも構造耐力上必要な登梁が欠失した箇所があり、竹の支柱を立ててようやく倒壊を防いでいた。

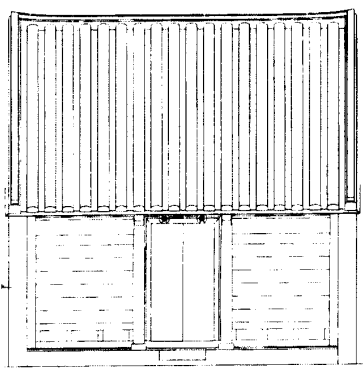


図4 チャンフー121番立面図

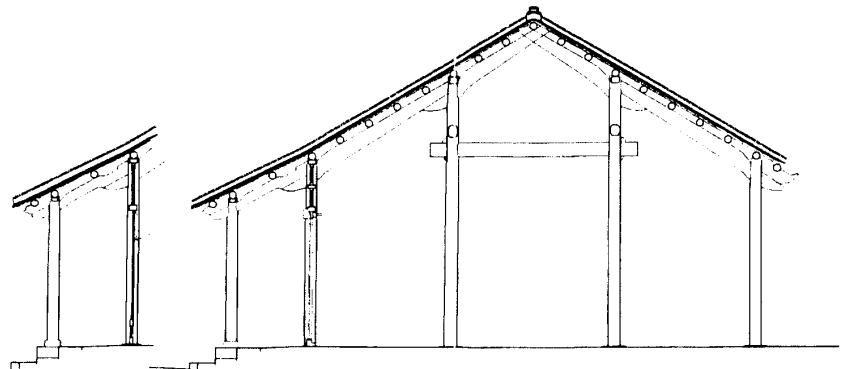


図5 チャンフー121番断面図

残存している部材にも蟻害があり、柱や梁などに内部が空洞化しているものがあった。正面側の仕切りのほか、柱間装置はすべて欠失していた。

(2) 今回の工事内容

解体格納及び前面塀仮設：建築年代が古く貴重な家であるが、倒壊寸前の状態で、各部材も腐朽が大きく、大がかりな繕いが必要と考えられたので、今回は緊急に解体格納だけを行った。後日態勢が整った時点で補修組立を行う。居住者の戸締まりと町並み景観の維持のために前面に修景した塀を仮設した。塀の内側に保存小屋を設け、部材を格納した。

3. 緊急屋根葺替事業

チャンファー通りの伝統的家屋の多くは雨漏りがし、放って置くと日一日と腐朽が進んでいく状態である。この中から今回ホイアン遺跡保存事務所の選考リストに従って、応急の屋根葺替工事を行った。工事の監理はホイアン遺跡保存事務所が行った。日本側は当初安易な部材の取替によって文化財の価値が損なわれることを懸念し、部材の取替は屋根瓦、垂木、母屋に限るように要請したが、結果的には軸部材の取替や柱の根継、欠失部材の復旧等も行われた。実際には破損がひどく、そのままでは保存上問題があり、一概に不適當な措置とはいえないと思われる。